

創薬研究者になるまで

第一三共株式会社モダリティ研究所主任研究員 **鈴木 正則 氏 (高校43期)**
博士(薬学)



1991年	立川高校卒業
1995年	東京理科大学理学部化学科 卒業
1997年	東京大学大学院理学系研究科化学専攻修士課程 修了
同年	第一製薬(株) 入社
2000-01年	(財)相模中央化学研究所 派遣
2016-19年	東京大学創薬機構構造展開ユニット(特任講師) 出向
2019年～	第一三共(株)モダリティ研究所 主任研究員

立高生の皆さんこんにちは。私は高校時代には思いもしなかった製薬企業で新薬を生み出す仕事をしています。自分が創った薬が病気の人々を救う未来を思い描きながら、日々の研究に臨んでいます。この文章が、少しでも皆さんの進路選択の参考となれば幸いです。

立高に入学した私達は、初年度は旧校舎で学び、プレハブ校舎を経て3年生でやっと今の新校舎に入りました。部活引退後は、放課後の教室に有志で集まり勉強をしました。最上階からの富士山の夕景は忘れられません…。当時の自分は理科の教員を目指しており、化学と物理のどちらを専攻するか悩みましたが、数学的センスに乏しい自分は、本当に物理を選ばなくて良かったと思っています。それから、英語は最も投資効率の高い科目ですので、進路にかかわらず十分な時間を投下して下さい。きっと将来、大きなリターンが得られるはずです。



東大本郷キャンパスの夏

学生時代は、清明寮臨海教室や神城山荘スキー教室のスタッフとして在学中以上に立高の行事に携わり、本当に多くを学び成長させて頂きました。4年生からは卒業研究として教員が運営する研究室に配属され、最先端の研究に触れながら研究の基礎を学びました。そして立高での教育実習を経て自分が教員に向かないことを悟った後は、研究者を目指して外部の大学院を受ける道を選びました。運良く東大の大学院に合格できた自分は、大学の寮に入り朝から晩まで研究室での実験漬けの日々を過ごしました。この時期に、研究者としての基本や心構えを鍛えて頂けたと感謝しています。そして、専門の有機合成化学だけでなく生物系の勉強もできる環境に進みたいと考え、製薬会社への就職を決めました。



東大本郷キャンパスの秋

医薬品は特許が切れるとジェネリック薬が参入して売上が急速に落ち込みます。つまり、新薬メーカーは常に新薬を生み出し続けなければならず、研究開発に多くの投資がなされています。その研究開発の現場では、幅広い領域の専門家が最先端の技術や知見を持ち寄り、試行錯誤を繰り返すことで新たな知見が見出されていきます。世界中の大学や研究機関、ベンチャーや製薬企業が創薬研究に携わっており、常に最先端の研究成果を求めて凌ぎを削っています。研究の過程は、①アイデアを練り(Plan)、②実際に実験して(Do)、③結果を見て(Check)、④新たな次のActionを起こすというPDCAサイクルを、まるで螺旋階段を登るかのように繰り返します。厳しい面もありますが、思いがけず素晴らしい結果が得られることもある刺激的で遣り甲斐のある仕事です。「医師は同時に一人の患者しか救えないが、一つの新薬は世界中で同時に多くの患者を救うことができる」と信じて日々研究に向き合っています。



東大本郷キャンパスの冬

世界中の患者さんのもとに新薬を届けるための創薬研究の場で、皆さんの実力を存分に発揮されてはいかがでしょうか？心からお待ちしています！！